第１３９回　関西大学メディア懇談会（Web 開催）　実施概要

1　日　時　　2021 年 11 月 17 日（水）15：00 ～16：45

2　場　所　　オンライン形式（Zoom ウェビナー）

3　内　容

(1) 研究発表（15：05～15：50）　※20 分×2 名

発表者①：　松永 薫（外国語学部助教）　Ｐ１～２７

【テーマ】 英語圏での留学に伴う様々な葛藤とアイデンティティー形成

発表者②：　都築 和代（環境都市工学部教授）　Ｐ２８～４５

【テーマ】 睡眠環境に関する研究 ～換気システムとエアコン冷房時間の影響について～

(2) 学内状況の説明（15：50～16：30）

① 教学 IR「学生が求める授業とは」 ～2021 年度学生・教員アンケートの結果から～　Ｐ４６～６１

②「留学生就職支援コンソーシアム SUCCESS」の創設について　Ｐ６２～６５

③ コロナ禍の留学に迫る ～現在ドイツに留学中の学生と中継し、リアルな声をお届け～　Ｐ６６～６７

④「関西大学気候非常事態宣言」の発出について　Ｐ６８～６９

⑤「関西大学 SDGs パートナー」認定団体の紹介（10 月末現在）　Ｐ７０～７１

⑥「サンゴ群集再生技術研究」におけるクラウドファンディングの結果報告　Ｐ７２

(3) 意見交換・質疑応答（16：30～）

・テーマを問わずその他自由にご意見・ご質問ください。（音声および Q&A いずれでも可）

※質疑応答の時間外においても、Q&A 機能を使っての質問は随時受け付けます。

→時間の都合上、後日回答になる場合もございますこと、あらかじめご了承ください。

4　大学側出席者

前田裕学長、青田浩幸副学長、藤田髙夫副学長、佐々木保幸学長補佐、
松永薫助教（外国語学部）、都築和代教授（環境都市工学部）、山田剛史教授（教育推進部）、
松並久典総合企画室長、藪田和広学長室長、植田光雄学長課長、依藤康正広報課長　ほか

以　上

【次回のメディア懇談会（第 140 回）について】

2022 年 1 月下旬の開催を予定しております。開催決定の際には、改めてご案内申し上げます。

英語圏での留学に伴う様々な葛藤とアイデンティティー形成

外国語学部　助教　松永　薫

【概要】

近年、海外留学を目標に掲げる学生は少なくないが、実際に海外留学をしてみると、その経験は楽しいものばかりではなく、様々な葛藤やチャレンジが伴う。英語圏の大学に留学する中で留学生が直面するものの一つとして、制度的規範（institutional norms）というものがある。これは、大学という組織の中で、履修している科目の単位を無事に取得する為に必要な、明示的また暗示的知識と深く繋がっている。例えば、レポート課題の中にも文献レビュー、論証型レポート、調査型レポート、実験型レポート、実習レポートなどがあり、それぞれ書き方が異なり、用途に応じて書き方も変えなければならない。また、履修する科目や専門分野によってレポートの中で使用しなければならない引用文献や参考文献の種類も、APA スタイルから、ハーバードスタイル、オックスフォードスタイル、シカゴスタイルなど使い分けなければならず、書き方を間違えてしまうと大きく点数を引かれてしまうことがある。この他にも、授業によっては、教員が学生ひとりひとりの授業参加度を測り（participation marks）、総合評価の中に加えるものも多く存在し、学生は主体性を持ち、積極的に学生同士や教員とのコミュニケーションを円滑に運び、行動し、問題解決能力を発揮し、授業に貢献することが求められている。このような知識、スキルというのはグループワークやグループ課題を行う中でも必要とされており、これら以外にも、理論の応用、理論と実社会・雇用現場との関係性を明確にする力などが求められることもある。

上記であげたもの以外にも留学先の大学で必要な知識・スキルというものは多く存在し、授業の中で教員よって、明示的また暗示的に開示されることもあれば、開示されない事もあり、日本の大学とは異なる制度的規範に戸惑う日本人留学生も少なくはない。このようなことから、留学生活というのは日常コミュニケーション能力だけでなく、学術的な言語応用能力や学術知識など様々なスキルや知識が必要となってくる。また、このような環境の中で留学生は海外留学という経験を通じ、自身の弱点、苦手分野、また、自身のアイデンティティーというものに向き合わなくてはならない場面に遭遇する。そして、それは時に葛藤や絶望、恐怖心（hysteresis）などが伴うことも多くある。このような体験を通じて、留学生がどのように主体性（agency）を持ちながら行動し、各自が持てる力やリソース（affordance）を応用し、ポテンシャルを発揮させ、困難を乗り越え、変化するのか。ブルデューのハビタス、フィールド、ヒステレシスなどを用いて流動的なアイデンティティーの状況を分析する。また、教育を通じてのエンパワーメント（empowerment in education）などにも自身の研究では注目している。

【プロフィール】

1985 年愛知県生まれ。関西大学外国語学部助教。専門は、国際教育（高等教育）及び英語教育。中学卒業後、単身でオーストラリアに渡り、留学生として高校、大学時代を過ごし、大学卒業後は永住権を取得。その後、教員経験、大学院（修士課程、博士課程）を経て 2020 年に日本に本帰国。2008 年フリンダーズ大学教育学部（高等学校教育）卒、2013 年モナシュ大学修士課程（TESOL）修了、2020 年モナシュ大学博士課程修了。2009~2012 年南オーストラリア（アデレード）の初等・中等教育機関で教員として勤務。2014~2017 年名古屋外国語大学非常勤講師、2015~2017 年愛知淑徳大学常勤講師として英語教育に携わり、2018~2020 年モナシュ大学 teaching staff として教鞭を執る。2021 年より現職。

睡眠環境に関する研究
～換気システムとエアコン冷房時間の影響について～

環境都市工学部　教授　都築　和代

【概要】

ヒトはおよそ人生の 1/3 の時間を睡眠に費やしている。睡眠はヒトの健康と活動に大きな影響を及ぼすため、厚生労働省健康局は平成 26 年に「健康づくりの睡眠指針 2014」を、WHO（世界保健機構）も睡眠に関するガイドラインを発表している。睡眠－覚醒のリズムは脳視床下部から分泌されるメラトニンホルモンによりコントロールされており、メラトニンの合成や分泌は光の影響を受ける。実際のところ、日本では暑さ寒さが睡眠を妨害することが知られている。室内環境は断熱や気密など異なる住宅性能のもとで屋外気候や季節の影響を色濃く受ける。また、暖冷房機器の使用が不可欠であるため、快眠や健康に生活するための設備機器の開発が進んでいる。

都築は温熱環境が睡眠や体温調節に及ぼす影響に関する研究を実施してきている。具体的には、実態調査のほか、人工気候室という温湿度が設定制御できる室や体験型モデルハウスを使い、温湿度や気流の分布、空気質などの測定とともに、人の寝付きや睡眠効率、発汗や皮膚温などの体温調節を測定し、暑さ寒さの感覚や眠れたかどうかなど主観的睡眠感を質問紙により尋ね、定量化してきた。今回は、近年実施した、換気システムとエアコン冷房時間の影響について概略を報告する。

2003 年の建築基準法改正により新築住宅には換気設備の設置が義務付けられた。そこで、全館調湿・換気ユニットが導入された住宅において、調湿ユニット使用の有無（デシカント換気 vs 普通の機械換気）と冷房使用によって形成される環境と、そこで眠る人の睡眠や体温調節を調べた。条件は、睡眠時間の半分でエアコンのタイマーを設定し、冷房が途中で切れる場合について検討した。エアコン冷房が切れると室温は上昇する。換気による外気導入の影響よりも、日中から建物に蓄積された熱が室内側に放出され、1 時間で約 3℃室温は上昇した。一方、相対湿度はデシカント換気の場合、屋外から換気で流入する外気を除湿しているため、室内は約 50%の相対湿度に留まったが、普通の機械換気の場合、夜間の高湿な空気がそのまま室内に流入し、相対湿度は 80%まで上昇した。人への影響は、普通の機械換気による高湿な空気の流入は眠っている人の中途覚醒を増やすとともに、皮膚の濡れ面積率を増加させた。さらに、普通の機械換気では、起床時に暑く不快側の申告となり、睡眠感のうち睡眠維持や疲労感に悪影響を与えた。終夜冷房を使い続けるか、冷房をタイマー設定で睡眠中に止める場合には湿度コントロールの有効性を示唆している。

【プロフィール】

1990 年奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。学術博士。日本学術振興会特別研究員を経て、1992 年工業技術院製品科学研究所　研究員。1996 年～1998 年アメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレー校 Research specialist。産業技術総合研究所　主任研究員、グループ長、総括研究主幹を経て、2016 年豊橋技術科学大学大学院工学研究科　教授。2021 年 4 月より現職。2011 年～2023 年日本学術会議連携会員。2020 年日本建築学会賞(論文賞)「睡眠と体温調節に基づく室内温熱環境の評価に関する研究」。専門は建築環境工学。